



曹元理が事  
趙連が事  
支坊源性が事  
安瀧晴昭が事  
時緒と事  
氣義古事の事  
いろは四付言事

脣勾股候  
縱横屈委通道  
脣義極きあらざる事



綱抄 四之卷 目錄

九州帝國大學理學部  
6929  
物理學教室

理學部 和 遷及  
022132002012590



九州大学蔵書

曹元理が事  
趙連が事  
安源性が事  
安信源性が事  
時緒が事  
氣義古事の事  
いろは目付古事

脣  
勾股  
縱橫  
脣  
義  
括  
いろは目付古事



綴抄 四之卷 目錄



九	九	九	九
正	正	正	正
大	大	大	大
正	正	正	正
10	10	10	10
年	年	年	年
月	月	月	月
日	日	日	日

806030  
4  
大正12年10月29日  
數學物理學教室

曹元理が事  
趙連が事  
安培源性が事  
安培晴時が事  
時緒が事  
氣義古事の事  
いろは目付古事

喬麦代ミ定法  
本換入解法  
盈入解法  
通引之義  
勾縱接股換通引之義  
喬摸脣交織道



增補篆法疑疑抄四之卷目錄

九州帝國大學理學部  
6929  
物理學教室

和 遷及  
02012590



学藏書

塵劫記之燐真教之祐

白股綾術主之客

合藏後列法

同切口捨寸法

二組四色列法

三組三色列法

二組三色列法

同采太豆麦組合

同義本之術

白赤黑綠組合義本

盈胸列法

方臺列法

合基列法

栗石綾術主之客

合藏別法

盈胸列法

方臺列法

合基列法

栗石綾術主之客

合書之迎年宣板入書

と此ノ以甚汝捨改義云

東方宣卷化と云也

寫ち校正と改修之書を

以後アセ不及ヤ、之を

手が大出ス而却て押レテ

死ふ云かえんの我慢す

と全念之に従て由後

ひてもえもくまゝの内

遣とさうしめやうんが

たれりくらは體文をほへ

手力中年より前輩

ひくはくからひどり

増補萬葉綾術抄 四之卷  
迎年岡板の萬葉と又氣にその  
有智と目深又ハ般年比宇書  
ふと拂ばれし一規矩盈胸色  
右人極可見一親矩盈胸色  
いとばくに兎童れとてわきびと  
あうも済うあざくとゆる  
さゆたげとふきうきよよれと  
うちあを弘と云ひうべと  
右ノ内勲者と云一人と  
極と極とくほくとみ度みり

改之どもあひ後にも改  
ひ是のとくわきう務が  
かう事也どもらむる如  
くじんあとをほと  
さぐとやらんにかのめぎり  
どとのとば改やそんにハ  
便宣八年にかよびて  
作つぢりと村殿義益の  
勿様改にわきましる書此  
すうともゆうふがたて  
ひのとくまくひづけ  
あれやへせるらやまやの  
部にさせたびへ増補不  
仕かりとて又手に神文と

源氏にいはれどて立ち一握りとた  
だして考勤とまつりと一握り  
を勘者をかくわうゆべしもすこ  
さればうきをもくさにも千里へ  
足の下よりぬる山の微苔ミヅタガ  
かくわうや取ハサウむ一筆一勘へ  
渴カニシういえり人ヒト歩ハシふ万マツの迷ミいよ  
あらん故に考勤勘カウキンカンの手獨  
賢教カノンに似たまごとくとくとくと  
とがくとえびをもひめ書シナフの  
渴カニシうとだべ一勘カウの助アシとま

智弘人に法をかきと  
もかしきと傳へどもと  
云ひおれゆうんでお  
師としておみにかへ  
てさうがくせんに最後  
得すと却かうに師の  
如摩をも參ぶされと  
今度は汝と我とまく  
こと見ひよとひに师も  
ものたれへ不<sup>可</sup>能<sup>レ</sup>が  
きく汝をも送り差す  
事もあらすゆきりに  
ては能かとけまつては  
べとのえとおれに化  
せりかわにアサリもの

称よりうと以ても人每に他力強  
しくなり自らの得と失事より  
称よりの自今以後無効廢め  
人手が得るとたゞしてをへ助と  
かし経手を又吉田芝由せのから  
しやう経と法人のえりけんうたれ  
に法と近づく出でましゆる日ひ  
開板書に法式と付せむだりうも  
絶者とたゞに向に手小神文とく  
せうる人ありされど手元どか一  
を小神文と傳ぐれは彼書小神法

增闢疑抄四

御城下の町屋にかかて  
美術の額と毎日で  
らとち小手縫ふくも  
魚とらふとく彼紙とえ  
付初共あくとよしとも  
ひをうすがとまとうか  
んにかうむうきく投  
題をもひやりつに額  
の振ふるね遠にえにや  
ひゆ一トもがにあく  
一立がさんとせと彼  
仁引ひめ是能く青ふ  
にかうはんとてもの原  
にかうはん彼式を

一  
「よがくやとせんせん紙を  
うきひつと手がかり  
あても知れぬ事か  
せにうきしたるのひまき  
とがんじんでゐたの後  
ふきばきは斗と傳へ  
て御主へくらをとて  
正絹タヂカ由一小前後と  
うりやがらと一ともも  
被書き小おえんひまと  
書出せういせん小手写  
「うぐいしゆあひかで波  
仁乃毛一筋くまねーと原  
にけりと御も用板等小  
へあぐくを急ごりては

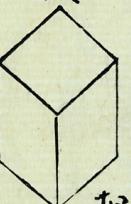
筆をも彩法へ向ひ益わん故小  
教ひも書つ廻達の達法と云つて  
くううとてゆふて一 次小さんも書つ  
百姫と出はるに手寫體の右へ一  
よりをろ小多く姫出せ一 妻御  
と毛比氏へか一川ぐんの姫と家體の  
形法と云ふ負教とつけ式の書面の  
飾とあく終りのひやくは御体の上  
今乃妻魔劫破へぬうと色  
ひそひそひそひそひそひそひそ  
乞うまちがえむわからんととかよ  
乞うまちがえむわからんととかよ

おやーくばでれもゑのち  
清らまーがす田今もう不  
ぬうつに板竹にむきのる  
せ一深うかく草と草を  
せに小かくばがやうのを  
毛いきい草一小い布を板竹  
えびえの板竹とくらく  
きくすい旦そひと乃板竹  
へきはもうろく草書に多  
きからく孤失経営戻  
玉武やが今いきるに紀  
くさく板竹にも出るよ奥  
うきく草小竹とあ

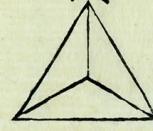
思記小出でり助者へは法を澄して  
せ小つてたまく又東洋ノ義士を  
考種としても勤学かうべー化ば  
自然小を哲見的軍と手加くま  
幸のん

お小代はとくは老え  
培補不仕は能とも前後  
青書ゆきは小家小ぢう  
て何も不記にてへ書面

さびくおえ「やれは美  
術小付だらむ」やう  
小洋とくとてあるし約  
さうりと枚多く人い  
義礼をくたづねもあ  
やんれ

方を人  
  
中洋千洋  
藝林洋八百九拾洋合

むく唐小曹元理  
人えん納小名どくとく  
朋友に潔廣漢とく  
て義美せかんあくわる

方を人  
  
三中七寸五分  
洋百八洋或合五分  
艺林洋八百九拾洋合

曹元記と云ふて  
食とまめびととひの  
に秋東の花小茶  
かくしを養う事な  
まくば多考ひ  
「とやまの曹元記食書  
とまく十ねびくと  
してふくと後小是  
とがんよる小是合もな  
事かくあはれの  
園かく茶未不足か  
是ハ儀内肉小茶の茶  
その室へ茶と入るをば  
まくまく茶未入るや  
奇妙の事にあらしく  
先方を人と茶合百片又方を人と  
除へ立す是と茶合或拾立片是とを百  
片内が減へ止継七拾六片是と茶合除へ  
八寸分を茶合是方本又と茶四寸三分三  
厘と茶四寸三分二と茶合拾八片七合五  
片是と内やく減へ止継五拾六片或合  
立す如又方を人と茶合く百片是  
右を七寸八分と茶七百立片茶合三  
法セニニと茶三百或拾四片七合五  
片是と茶合四片七合五  
片を三十九小除一百〇八片或合四片七合五

本序小序五百余字を分譲如く  
もつて一人の手を止め  
やへやれどもよく要例の  
ものが少ずつてはうるを  
とあらひかどさざて波費え  
理ハ多双の考証あるま  
ぐうとせんじもさうては  
でも不義のにうの枝と  
かげにてをきのまと  
いふとくえく書つてめ  
ううこーのむうひがお  
を接ねゆく今時の充の  
おもてのうのうせりや  
うう紙かげとせよ是をまよせりや  
やゆくにうのうせりとばそーううと  
おもての本と集出一きくせうたまけ  
振ふれたとばゆるにほる  
えええ本傍入るや  
かくす仕事とや 番号手がけ

を後ウタシテカモカモ勢  
熱も知どツテキタニ  
ミシテモ重合のたゞも  
ニミシテモ重合のたゞも

ノハナリセキドトモヒキシテ  
用ひに要と或度重合入ニミシケ  
ルトシヘシ法ス之ヲ起ハ  
ルトシヘシ法ス之ヲ起ハ

人至くニセテノミヒキシテ  
ノハナリセキドトモヒキシテ

前合ノ不見御アリテ  
テナリ小音義の前合

ナリベシテノ前合

貫一ノ  
定法 徒法 五分二五法

周法 六十。三三八法

先秦法七九。五と重合六拾武坪各  
又費半々と重合或拾五坪各是を

坪と加ハ括七坪立合と亦是一六方竹六  
と重合法と加又周法ハ徒法立ニ立小く  
むク是の銷連よく筈を  
小豆根木とくわきと席  
上にあらざく三不との  
般とくわと讀得との書  
にあくよ一色も其年の  
根とくわくさんや波趙集  
万石の根とても其年の  
んざなう小豆根とくわ  
えうと津義のねじと  
殊務をうとううあぬ

是の人の人間力が年々あると  
へ心中にうるさい教を知  
とく事で何事かを  
えんえどくと寄めてやう  
にひきへりうるが近事の  
勘定が少しあつて、そこの  
人と上陸する船と一緒に  
そとひまちの船にてたそ  
ねる。今度はそとに耳か  
もつける体がうれしく  
うちれ不本ほ童ひうれし  
と絶えよむにとどけば

右の如きを三者取扱ひやくも定也  
此小取法要勘の如若二人のとハ兩  
三人のとハ三取に書けり毛とモ化流  
ハウミ我流が能くかまうめく也  
此より方角と天地陰陽小大と一なり  
日月と二氣と山川と水火と風土に  
平素小見ゆる是と陽ととて平素  
右法七九と用ひけり角方と地とて  
法小たとくとくの如きが也「小何れの如  
ゆくも角方あるものハ地のわと地より  
て見るによく自由にて法を宣す」也

漁翁の歌あわ軍  
の時代にを支那源性と  
つゝものあつ卒は但洞小網  
云してを士な魚尉源整子  
のう優秀な才ゆく往  
きとがる此と仰義之と  
しきのえく自後せう跡よ  
跡輪へよみにくれ家の  
序結てかくねく夏東下  
豆年云一きりとひこ  
要術の藝へあ時玄双そ  
田次里坪へつともう低  
名短のさく眼力のやう  
不ふすもたゞべとせん  
人是と見てあしもう

絶る日月の於平素云々人也と云ふ事  
何ぞ此う云ひれ候のう空虚極ゆく  
正氣を起と人毎に化流へゆき我流  
へよき事は是が爲めか勤力極ひ候人の  
事也此理と不知人へてかうかうだ  
也と云ひまうやう小切もよハ難筆  
中ひくべからむいは極小ひそひ小切  
も書法の點とが妙なる人ハ自命古  
自由小切ものこの小書算に及ばざ  
れども其はと付ひくとも人ハ法に  
不達の書法と想ひうねりせる五度

ちうと奥州伊達郡に  
境目乃お徳あるその美  
檢のたり深性どつままで  
きるにそのはまゆくよく  
ねをもり山つぐれとと  
にまく松鶴と一見せを  
かまひくこれとをむき  
る不に日よき里をうを  
まびひうすを落と入付  
て石どううごとかもい  
素内へるにを傍一人  
わりて名へらんかくら  
けたうまくわらじの傍  
あらゆるく裏板と板  
かくの葉にまくで敵の

みを一も立たニ立とめり我法  
に九三と用也に九三にとかばり之  
も執ひ方わべお徳でしん細小  
源小丈へもたとば人拾人あつま  
ハ八九人とむとんじらひくら  
そとく委の人のひやくいもとなね  
も又駆也たもひ百人奉人集うりて給  
ても不勤ひくもと益々一極波義  
者起法小毛比海陽と引人船波  
れかしたまどもモ理かとすゞらく

つよとたまけたう教  
もまく種こみ法と  
法もるにくるその奥義  
とあくせうね聖物は傍  
つやう秋へ是よ下  
の萎作あつ樹の萎  
とく洞中へとそ  
かとくとくへとやそ  
うなんたまひだ監人士  
ノ引ひたまひ医師の義  
もくも理とつくと  
がまくさんなかく  
くる御性乞とまひ傳起  
きてやうがる荒涼の  
まよひまく井底の海

地小庵くえとまく草木  
地軟衣刻触分もととく小  
だくんやまろとまく是とまく  
天地隔たりてまくあいそんやまく  
さくれ起法とあくくやだば彼義志  
手が萎作ひあくといまく一袖  
の因小そくせきまく愛めぢる勘  
者見聞せとばさざとくがん板  
ばや九三小毛起く一理ありと  
執ひ方わく相達てやく細小  
きば四九三。ばかりとす葉たくまに